世は春になる
春よ我等の前に
樂しい天地を造れ
自分は日毎聞く
春よ生れ來る弧々の聲を
元氣に滿ちた弧々の聲を
樂しい春よ
我は祝ふ
ヴイナスの誕生を

小景

妻子らは椽側の日南に遊び
畠の彼方を通る汽車を見て
赤ん坊は聲をあげ手を握り緊めて喜ぶ
汽車は去り、殘る煙は忽ち青空に消へさり
日は麗らゝかに麥畠を照らし
線路の向ふの丘の上の小さい家屋が

玩具の様に美しく輝き
暢氣らしい人が線路傳ひに歩いてゆくのが見へる

壯麗な冬の夜

夜は暗く
寒い嵐は
天地を狂ふ
けれども見よ

天の一角には燦爛として
三日月と星の美しい群が現はれてゐる
女神の側に侍づく天使の群のように
星は新月の周りに集つて飾つてゐる
何と云ふ高貴な眺め！
木枯よ吹け
息を限りに
この壯麗な冬の天地を奏せ

ロダンの言葉 一

いつよんでも
いつ思ひ出しても
否よく思ひ出しては
今更感じる
ロダンの言葉
永遠の言葉

敬虔な感じにつまされる
貴い言葉
涙ぐむ程美くしい
魂の言葉
人類の父だ
ロダンは
感謝し切れない恩師だ
勿體ない位
清い言葉

聖い藝術の有難さ

ロダンの言葉 二

思ひ出す度びに
胸にふれる
ロダンの言葉
自然の貴さを
ロダンの言葉は

生かし譯してくれる
感謝して聞かう
感謝して喜ばう

病人は

病人は
病氣をよくする事に
努めてくれ

疲れたものは
静養して
新しい力を以て
更に仕事をしてくれ、

病人が

あゝ病人が
病を重くしても

働かなければならす
疲れたものが
いやが上に疲れの加るのを知りつゝも
働かなければならない
この現代の生活は
たしかに不合理の故だ
病人を手厚く看護し
疲れたものを慰めいたはり
健康なものが働いて

助け合ふ世界よ。
早く來い。

寒い朝

あゝこの寒い朝あけに
働きにゆく人々
あの人達の中には
病ををして居る人もあらう

疲れ切つて只一日でも否雨の日だけでも僅か一時間だけで
も休みたい人もあらう
それだのに健康の俺は
自ら働かず怠けくらし
同胞の爲めに害になつても
何の益にならぬのは
悲しい事だ
俺にとつても、人にとつても
どふかしなければ駄目だ

死

一

死は恐ろしい
死ぬ事を思ふと
たまらない
死に度くない
しかし死ぬのだ

死を恐れたくない
死を恐れず
死の恐怖を忘れるほど
正しく元氣に生きたい

二

死を恐れてゐる時ではない
自分はかく思ふ
そうして元氣に生きる事を考へる
死ぬ事を考へるより

生きる事を考へよう
亡びる事を思ふより
生き榮へる事を思はう

三

生きる道
自分に許されたそれは
只一つの氣がする
その道を進めば
死も恐れないで

勇氣に滿ちて行けると思ふ

子供を脊負つた女が

子供を脊負つた女が
夕暮の道を行く
子供は脊中で顏を大空に仰向けて
笑つてはしやいでゐる
その上に三日月と星が

薄く現はれてゐる
子供の顔に反射して
灯がともつたよう
母は一歩〳〵暗くなる道を
一生懸命踏みしめ〳〵歩いてゆく
背の子供は一人で喜びをどつてゐる

鳥の群

自分は見た
海上の天遙かに
鳥の大軍が波打ち乍ら渡るのを
天の一角を黒くして
どこへ飛んでゆくのか
あゝ彼等を見るのは喜びだ
今の世に尙彼等のような
大浮浪の群がゐるのか
自分は友と歡喜の聲をあげて

彼等を見送つた
壯嚴な感しがした
宇宙萬歳を叫びたかつた

魔

夏の日の午後、
突然天の一角に
ドス黑い惡魔のような雲が現はれ

爆發し乍ら
黑煙をあげて
長いいやな陰氣な尾を出して
空中を飛んでゆく。
見てゐても畏怖を感じる
危險な感がする
光明はかくれ
地は幽暗な谷に變化する
暗い雲の中には星が明滅する

彼はまつたく危險な惡魔のやうな魂をもつてゐる
壯んに爆發してゐる雲は黑煙を流し
尖の裂けた無數の陰氣な尾を振り乍ら
暴れ狂ひつゝ飛んでゆく海の方へ
彼は雷雲だ
彼は遠い海の中に棲んでる魔にちがいない。

海の夕

夕の海の華やかさ
あげて來る潮、强い風
小舟は勇んで走り來る
風と波とは戯れて喜び騷ぐ
海の夕の華やかさ
入道雲はとう〳〵太陽を呑んで

美くしい陸には燈火がチラ〳〵燃える
小舟は入江に入つてもやひ
人は懐しい陸へかへる
海の夕の親はしさ
潮が満ちれば風は忽ち修つて
海は静かに和らいで
澄み切つた空に
おう三日月が肅まし く
恵み深く光つて出た

三日月

三日月を黒い雲が覆面した
X光線で見るような魔の手をのばして
三日月は怒つてゐる
烈女の怒り
凄いような美くしさだ

夜の雨

夏の夜の都會に
突然大きな夕立が來る
瀧の樣に降つてすぐ止む
清い冷たい水が强い勢ひで
凄じい音を立てゝ地面を叩く
水の幕が擴つたように

白い皺が風に吹かれてよじくれ乍ら
波のように立つたまゝ道の上を流れてゆく
水柱が立つて走るようだ
何も彼も水煙りと飛沫で見へなくなる
が忽ち雨の勢は衰へて止む、
道路にはぽつくり出された石が
磯邊の樣にころがつて光つてゐる
濡れた下駄で歩いてゆく、
見上げると空は深くギラ〳〵とし

膏切つた月が冴々としてゐる
海の様な深さだ
空氣は凄いほど新鮮で花やかで
强壯な喜びが滿ちる
道路のヨーカリ樹や柳の茂り切つた葉が
海草の様に急に丈が高く伸びたように空中に戰ぐ
風が颯々と吹く
ところ〴〵に窓を開け放つた建物が見へ
いくつもの窓の明りが無心の靜かさをもつてともつてゐる

おう新鮮無量
人は活氣づいて歩いてゐる

夕立

奔放な夏の雨は興奮して降る
羽博くような音を立てゝ
地上を打ち鳴らし
雷は轟く

創造の歡喜の歌を
地上に響かして
人も獸もふるへ戦かす
天地は興奮して歡喜する
すばらしい奇蹟が今行はれるやう
忽ち雲は碎け散り
瑞々しい世界が遠くから開ける
すばらしい光りの洪水だ
地上は湖のやうに水につかり

草や木は今生へたように突立ち
水と光の洪水に
世界は喜び輝く
新しい奇蹟が至る處に見へる様だ

赤蜻蛉

赤蜻蛉よ
おまへは可愛い、

どこから來るのか
どこにでもゐる
羽根をカサ〳〵鳴らしたり
そこらの石や物ほし竿や
至る處にとまつてゐる
赤蜻蛉よ
おまへは可愛ゆい

美くしい雨

烈しい雷のあとの
亢奮した天地へ
小雨が肅々と降る
神のような清い雨
美くしいメロデーが飽きずにつゞく
平和な感じがする雨

新鮮な感じが漲り渡る

朝

朝は來てゐる
遠くまで
長閑に冴へた青空が
世界の戸口を開いてる
樂しい地上の光りを眺め

私はイソ〳〵落着かぬ
胸に秘密のある樣に

親しい人の挨拶を
あつちこつちから樂しく受けて
朝日を浴びた貧しい町の
希望の道を歩いてゆこふ
私はいそ〳〵落着かぬ
樂しい秘密のある樣に

蝶

蝶々よ
おまへは氣輕にどんな花でも
馴れ〳〵しく
尋ね歩いて
樂し相だな

鳥でも蝶でも

鳥でも蝶でも
又花も
どうしてあんなに氣が輕く
のび〳〵樂しく生きるのか
いやに馴れ〳〵しく
自然と親しんでるではないか

蜩

夕暮になると蜩があつちこつちで啼く
一匹啼き初めると幾匹も幾匹も
同じ蜩が此方で鳴いて又向ふへ飛んで行つて啼いてる様に
そのせはしさつたらない
あつち、こつちを涼しい聲で
清めてゐるようだ

ほんの一寸の間だ
五分か十分位の間啼いて
それで役をすましてしまふようだ。

天の川

天の川よ
立派な驚く可き天の川よ
をう天界の星のアーチよ

驚膽する宇宙の大きな緑門よ
東の空から西の空へかけて
虹のやうに圓く輪をかく
限り無い星の群よ
何と云ふ美だ
自分は驚異し、嘆賞し
崇め、讃へる

感興

猛烈な感興よ
どこから湧いて來るのだ
そは無限から
その起原はわからない
わからなくてもいゝ
深い〳〵感興よ

波のように湧け

或時は

或時は忘られてゐても
思ひ出される度びに
喜ばれ、愛されるやうな詩
そんな詩がつくりたい
無視しやうとしても無視出來ない詩

今の人類や未來の人類から愛される詩
今の人類や未來の人類から顧みもされず、纖子扱ひを受け
無視され、忘られ、消えてしまふような詩
そんな詩ばかりかいてるのは淋しい、

海

家と家との間から
一間位の海が見へる

一間位の海の
何と云ふ深さだ。　大きさか

星

星よ、星よ
お前達はつながり合つて
うね〳〵と鎖のように
曲がりくねつて

消えたり光つたり
面白さうに踊つてるな
あり〳〵と俺にはそれが見へる
娘し相な御前達の
夏の夜の踊りに
俺の心も脈を打つ

Tの高臺にて

友と二人でTの高臺に來た
そこからは眼下に停車場の區域と
廣い青田が夢のように展がつてゐるのが見へた
何でも小さく美しく見えた
停車場も、休んでる汽車も柵も、幾十本のレールも
毛の様に細い瓦斯燈も

丁度雨が晴れ揚るらしく
西の空一面に血管が破裂したように
火焔の雲が立ち昇り
その色と光りがそこらに映つて
目を奪ふ様な光景となつた
虹を吐くような精力的の眺めだ
そこ〳〵の瓦斯燈が奇異な光りを放つた
まるで眞珠のように燦めく
自分達は驚き叫んだ。

更に遠く東の方には今燈のついた市街が
煤煙に曇つた廣い展りの中に軟く生物の樣に蠢めいてゐる
殊に高い建物の七つ八つ圍つた燈火が
新鮮な光りをチラ〳〵ともし
それが搖曳して空中を泳ぎ歩く樣に見へた
自分達の通る道には
高臺のこの良い眺望を控へた富んだ人の家が多い
青葉に埋れた垣から
幸福な子供を連れた婦人や家族が出て來て

すばらしいこの夕暮の空氣の中に
崖の上に佇んで遠い眼下の田甫や市街の方を眺めてゐた。

夏の夜の市

夏の夜の市の賑やかさ
人と燈火で道は埋つてゐる
化粧した女がその夫や戀人と澤山通る
彼等の肉體の美は

無遠慮に人の心をそゝる
美しい女を抱へた放蕩兒を滿載した自働車が
臆面もなく
心を浮き立たせるような笛を鳴らして通る
どこのバアでも氷屋でも一杯の人だ。
燈火の中に人が埋つてるよう
鏡に映つた迷宮のよう
女もゐる。子供もゐる。
まるで夜の歡樂の修羅場だ

飲んだり、食たり、騒いだり
歌つたり、
この歡樂の渦卷
これがこれが世の中の有樣か
がこの騒ぎの底に靜かさは流れてゐるのだらう

夏の夜の散歩

人の家を覗くのは

よく無いと知つてるが
夏の夜の町を歩くと
どこの家でも開けひろげてるので
つい家の内が見たくなる
どこの家でも燈が付いて
父や母がゐる子供の寢姿が見へる
樂しい天國を往來から覗いた樣
覗くのは惡いと思ひ乍ら
覗いて見ずにはゐられない

夕

夕方妻は子供を脊負つて
尻ばしよりで
家の周りを掃いたり
水を打つてゐる
自分は一日の暑さと退屈に倦み疲れて
やつと今午寢からさめたところ

ポンヤリ淋しさを感じ乍ら
水を打つ生々した姿を見てゐる
いつの間にか暑さが避つて
日の光りは蔭り
清らかな空になつてゐる
憔悴した勢ひの無い薄い雲が
瀧のように白く流れてゐる
室の中もキレイになつてゐる
妻よ感謝する

どれ顔でも洗つて
俺も元氣にならうか。

夜

夜が來た
暮はしいやうな恐いやうな
天界と地獄と見えるやうな
混沌とした大きな夜が來た

天空にはキラ〳〵と星の大きな旗が交叉し
地上には燈をともした廣い長い道が無數に交叉し
睡りの國へ急ぐ旅客が澤山通る
夫婦づれも獨身者も富んだ者も貧しい者も
徒歩の人も
大きな馬車に乘合つて大駈けてゆく者も
皆んな眼を細くして
美しい夢を貧らうと樂しい天國のホテルへ急いでゆく
急げ　急げ

馬も人も大喜びで、威勢よく
歡迎の燈のついた大道を
三日月と星の世界の下を
地界の光りのさまよふ闇を
堂々と進んで行け
遠かに　遠かに

小景

月の光りの交る夕の畠で火を焚いて居る
火の周りには大人や子供のかげがをどつて居る
大人は火を取り圍んで立ち乍ら語り合ひ
子供達が火の傍に近寄りたがるのを輕く叱つて居る
火はよく燃えて風の無い夕の空に赤く映り
人はうつとりと夢見心地で火を眺め

良い天氣の事や來る年の事や消えた
年の事を語り合ひ
畠の末には百姓家の大きな屋根が
どんな高大の寺院よりも神秘的で
又彼の廣大な大空よりも莊嚴な
巨大な古い藁屋根が彼處此處の空に浮んでゐる
然うして星は高いところからこれ等の
人と家を指して照らしてゐる

老車夫

家々は戸を締めたり燈火を消したので
空の星は際立つて明るく崩れるやうだ
都會は深い睡りの底に沈んで
十二時過ぎの町には人つ子一人見えない
この時一つの燈が地上二三尺離れた
ところを靜かに動いて來る

その燈は薄暗くみじめで今にも消え入り相だ
まるで天上を追はれた不運な一つの星の樣に
北風に向つてよろめき乍らやつて來る
オヽそれは薄い毛布にくるまつた慘めな小さい老いた車夫
である
彼はもう大變歩いたのだらう
蠟燭の火は燃え盡きて消えかつてゐる
けれども彼はその火で自由を失ひさうな
手をあぶり乍ら

客をあさりに十二月の凄い夜天の下を
引張つて歩いて居るのだ
いくら大都會でもこの夜更けに車に
乘るやうな人がさう歩いてるとは思へない
小さな老人は洟を啜り乍ら肩を縮めて
慄へながらトボ〳〵と車を引摺つてゆく
氷のやうな冷たい寢鎭つた都會の淋しい往來を
天上には赤く輝く天使の翅の樣に
燦爛と星が崩れてゐるけれど

あゝ何と云ふみじめな火と小さい老人だ
今にも小さな老人の生命諸共
どこかへその火は燃え盡きてゆく

車の音

夜中の二時頃から
巣鴨の大通りを田舍から百姓の車が
カラ〳〵カラ〳〵と小さな燥いた木の音を立て、無數に遣つて來る。
勢のいゝその音は絶える間もなく、賑やかに密集して來る。
人聲は一つも聞え無い。何千何萬と知れ無い車の輪の、

飾り氣の無い、元氣な單調な音許り
天から繰り出して來る。
遠く遠くから、カラ〳〵カラ〳〵調面白く
よく廻りあとからあとから空に漲り、
地に觸れて跳ねかへり一杯にひろがつて來る。 夥しい木の
輪の音、
夜もすがら
眠れる人々の上に天使が舞ひ下りて、休みもせず
舞ひつ踊りつ煩さい位耳を離れず、幸福な歌をうたふやうに。

氣が附けばまず〳〵音は元氣づき、密集團となり
朝の來るのに間に合はせる爲め
忙しなく天の戸を皆んな繰り出した音のやうに
喜びに滿ちた勇しい同じ小さな木の輪の音が
恐ろしいようにやつて來る。
一つ一つ夥しい星の中から生れてぬけ出して來る。
もう餘程通り過ぎて仕舞つたやうに
初めから終りまで同じ音で此世へやつて來る。

曉方になるとその音は
天使の見離した夢のやうに消えて仕舞ふ。
天と地とのつなぎをへだてしまふ
何處かへ蜂が巣を替へて仕舞た跡のやうに
一つも聞えなくなる。
鋭敏になつた頭には今度は地上のあらゆる音を聞く
馬鹿らしい夜烏の自動車の浮いた音や、
間の抜けた眠さうな不平をこぼす汽笛や、

だるさうな時計の響が味もなくあつちこつちで
眞似をして仕損つたやうに、自信も爲く離れ〳〵に鳴る。

あゝ毎晩々々、雨の降る夜も星の降る夜も、自分の頭に響て來
る
無數の百姓の車の音は自分に喜びを運んで來る
飾り氣の無い木の音のいつも變らない快さ
天から幸福を運んで繰り出して來る神來の無數の車を迎へ
る。

その一つ事に熱中した心の底から親切な、
喜びいそぐ無數の車の音、樂しい、賑やかな、勇しい音。

あゝ汝の勝利だ
その一生懸命な小さいけれど氣の揃つた
豐かな百姓車の軍勢が堂々と繰り出して行つたら何でも負
ける。
道を讓る
あゝ勇しい木の輪の音の行列よ

どん〳〵繰り出して來い。
天の一方から下りて來い
下界を目がけて、一直線に遠い〳〵ところから走つて來る星
のやうに
都會を目がけてその一絲も亂さず、整然と
同じ法則、同じ姿勢で
立派に揃つた、木の音で
電車道を踏み鳴らして行け、躍つて行け

揃ひも揃つて選り拔きの、よく洗はれた手入の屆いた、簡單で、
調法な、木の車の自信のある安らかな音色よ
何ものも御前の音に敵ふ奴は無い。
憎々しい惰弱な病的な汽笛や不平な野心の逞しい機械の音
より
どの位、
御前の勤勉な盡き無い木の音の方が俺は大好きだか知れな
いぞ、

前にゆくものゝ音を受けついで、後から來る者に傳へて、
赤兒のやうに生れて來る、
汝の盡きる事なく繰り出す音は
此世のものでは無い、天上のものだ
喜びだ、勝どきだ。

おゝ又氣がつけば賑やかな、いつも氣嫌な木の輪の音の群
滿ち、溢れ、盡きずくり出して來て
びつたり跡を殘さず消えて行く自信のある歌ひぶりよ神來

が來り、
大擾亂を呈して過ぎ去つたあとのやうに一つも殘さず、
漏れる事無く歌ひ終る。
無數の木の輪の音。
わが愛す、喜びの歌、

平易で味の無いやうで
無限な味の籠つた
天の變化にも追ひ付く、單調な喜びの歌、

天來の音、孤々の聲
簡單で完全な、よく洗はれた、手入のいゝ、親切な車の輪の音、
氣の揃つた賑やなコーラス
毎晩來てくれ、
毎晩調子を揃へて繰り出して來て呉れ
巣鴨の大通りを田舍からつゞいて來る
無數の百姓車の木の輪の音、
俺は毎晩待つて居る。きつと氣がつく

御前の來るのを待つのは恐いけれど
來てしまへば俺は元氣づいて躍り出す、
氣がつけば引つきり無しに遣つて來る、神來の喜び！
木の音の行列、夥しい星の歌一粒撰りの新しい音色！
天の戸をくる喜びの歌、朝の歌！
氣の揃つた一團の可愛ゆい小さな百姓車の進行曲！

（一〇、二五、聚、愛の本所戯）

わが子は歩む

わが子は歩む
大地の上に下ろされて
翅を切られた鳥のやうに
危く走り逃げて行く
道の向ふには
地球を包んだ空が蒼々として、

底知らず蒼々として日はその上に大波を蹴ちらして居る
風は地の底から凉しく吹いて來る
自分は兒供を追つてゆく。

道は上り下り、人は無關係に現はれ又消える
明るく、或は暗く
景色は變る。

わが兒は歩む

地の上に映つた小さな影に驚き
ひやみに足を地から引離さうともち上げて
落て居るものを拾つたり、拾てたり
自分の眼から隠れてしまひたい様に
幸福は足早に逃れて行かうとする
われを忘れて
どこまでも歩いて行く。その足の早さ、幸福の足の早さ、
道の端の蔭を撰んで下駄の歯入れ屋が荷を下ろして居る
わが兒はそこに立止る。

麥藁帽子のかげにゐる年寄りの顔を覗き込み、
腰をかゞめて、ものを問ふ
歯入れ屋は、大きな眼鏡をはづして見せ、
氣嫌好く乞はれたまゝに皷をたゝく。
暫らくそこでわが兒は遊ぶ。

わが子は歩む
あちら、こちらに寄り道して、翅を切られた鳥のやうに
幸福の足の危ふさ

向ふから屑屋が來る。
いゝ御天氣で一杯屑の集つた大きな籠を背負つて來る。
わが子は遠くから待ち受けて居る。
屑屋はぴつくりして立止る。
わが子は晴々見上げて居る。
屑屋は笑つて、あとからついて行く自分に挨拶をする。
『可愛ゆい顔をしてゐる。』と、
郵便配達が自轉車で來る。『あぶない』と思ふ間に、

うまく調子をとつて子供の側を、燕のやうにすりぬけて行く
わが子はぴつくりして見送つて居る
郵便配達は勢ひよく體を左右に振つて見せ
わざと自轉車をよろつかせて
曉方の星のやうに消えてゆく、

わが子は歩む。
嬉々として、もう汗だらけになつて。
掴るまいと大急ぎ

大きな犬が來る。彼よりも脊が高い
然しわが兒は驚かない、恐がら無い
喜んで見て居る。
笑ひ聲を立てゝ犬のうしろについてゆく。

わが子は歩む、
誰にでも親しく挨拶し、關係のある無しに拘らず
通る人には誰にでも笑顔を見せる。
不機嫌な顔をした女や男が通つて

彼の挨拶に氣がつかないと
彼は不審相に悲しい顔付をして見送る
がすぐ忘れてしまつて
嬉々として歩んでゆく。　幸福の足の危さ。
幾度もつまづき、
ころんでも汚した手を氣にし乍らます〳〵元氣に一生懸命
にしつかり歩こふとする。

未だ小學校へ入らない

いたづら盛りの汚ない子供が
メンコを打ち乍ら群れて來る。
忽ち彼はその中に取り圍れる。
皆んなから何か質問される
わが子は横肥りの小さな軀で眞中に一人立つて小さい手を
ひろげて
子供を見上げて何か告げて居る
子供等は好奇心と親切を露骨に示しメンコを彼に分けてく
れる。

何にでも氣のつく子供等は彼の特色を發見して叫ぶ
『着物は綺麗だが頭でつかちだ。』
かくして尙も先へ先へと歩み行く
わが子をとらへて抱き上ぐれば
汗だらけになり、上氣して
觀念した樣に靑い眼をぢつと閉ぢて力がぬける
自分は驚いて幾度も名を呼びあわてゝ木蔭へつれこむそこ
にはひやひやと

火をさます風が吹いて來て、
彼は疲れ切つて眠り入る。
一生懸命に歩き
一生懸命に活動したので
自分の眼には涙が浮ぶ。

（一〇、一一愛の本所館）

夜

鐘が鳴る。
一日の終りの
街のどよめきの上に
今太陽は朝よりも大きく輝いて
家々から町から、人間から遠ざかる
然うして人々は
その工場から、役所から一日の仕事から
開放されて
わが家に歸つて來る喜びと

一日の終りの疲れと悲しみが町の上に交り合ふ。

赤ん坊を抱いて夫を迎へに行く妻が幾組も通る
酒を買ひに行く女が通る。　さるや皿を持つた女が通る
魚屋の前にはそれぞれ特色のある異様な一杯な人がたかり
ごたかへす道の上には初冬の青い靄が立ち
用のすんだ大きな荷馬車が忙しなくゴロ〳〵通り
晝の暖さを一杯身の内に吸んだ子供等の
興奮して燥ぎ廻る金切聲が

透明な月の薄く現はれた空に
一つづゝ浮んでは、胸に殘つて一つも聞へなくなる苦るしさ。

一つづゝ星はあらわれ。下界目がけて搖れ來り
だん〳〵人の顏が見えなくなるに連れて
月は光を加へ高くなり
人の姿は異形となり、燈の數は赤ん坊のやうに殖へ
あちら、こちらで空氣を震かして
いそがし相に戸を閉ざす音が

天の扉が閉ぢられる様に鳴り渡り
歸り遲れた人々は興奮してせつかちに
たち籠めた闇の中を
大きな音を立てゝ飛ぶ様に通つて行く。

もう町には子供等は馳け廻ら無い。
ところどころに路上には薄茫んやりと
今夜の宿を來める勞働者が佇んで居て
最うぢき冬が來るけはひが

天にも地にも星の息にも人の上にも感じられる。
然し或る横丁の、湯屋の煙突からは
時を得顔に惡どい元氣づいた煙が寒い空氣にふれて息のや
うに立ち騰り
賑やかな人聲赤ん坊の泣きわめく聲が湧き起りうす汚ない
朧ななりをしたそこら界隈の
男や女が子供を肩車に乘せたり
三人も五人も一人でゾロ〳〵引張つたり
火事で燒き出された人のやうに

子供の着替やむつきを兩の小脇に一杯抱へて
恐ろしい路次の闇から異形な風で現はれ
赤い燈火が滲みもう〳〵と暖い煙の蒸しこめた
錢湯へ吸ひこまれて行く。

然うして月は暗さうに切口を輝かし
星は下界に近づいて、揃ひも揃つて大粒な奴が、
すぐ屋根の上に異形に輝いて
好奇心で下界を覗き込み

人間の頭の中は何かかぶつて來て、眼の見えぬ樣に暗くなり
心のしん許りが猫の眼のやうに光り出し、小さな焰を燃やし、
夜は更けて行き
凡てのものを美くしく、もろく、果敢なく、貴い、
整然とした他界のものゝやうに並べて見せ
夜の祕密は大きな重々しい混沌とした土塊の中に一杯附着
　したダイヤモンドのやうに
暗きを好んで異樣に輝き
燈の中に浮んで來る人の顏は恐く、

然し親切相に露骨になり此世以上のものを浮き立たゝせる

日が暮れて道を行く旅人は
せつかちに歩いても歩いても、思ふ所に達せず
廣大な夜の潮に押し流され、
道に誤つて居るかと不審を起して立止れば、
天體はぐる〳〵廻り、
眠たい眼をこすれば稻妻が發し孤に廻されてゐるやうに恐
くなり

さす〳〵せつかちに急いで行けば、幾度も石に躓き
餘りに夜は大きく、人間の少さな無力をつくづく感じる。
然し出しぬけに人は目的地に達すと
鮮がとれたやうに眼がはつきりして
見知らぬ町には澤山間の拔けた光りがともつてその中を人
がゾロ〳〵通つて行く。
餘りの明るさに自分の身の暗さを感じ
苦るしさが胸一杯に滿ちてくる時
出しぬけに自分の足下に氣がつけば

あゝ一生の思ひ出か
遠い〳〵幼な時
母に抱れて暖に
浮世の波風を外にちんまり行儀に暖つて居た
懐しい懐しい幸福が思ひ出され
疲れ切つて暗い宿屋に辿りつけば
他人の家も吾が家へ歸つたかのやうに生々感じ
煤けたランプの下に暫らく會はない、
囚に殘した妻や親子の顔がはつきり現れる。

あゝ夜を支配する廣大なる者よ
御身の胸に遍く人々を掻き抱き給へ。

(一、一一三)

野球

王子電氣會社の前の草原で
メリヤスシャツの工場の若い職工達が
ノックをして居る。

昼の休みの鐘が鳴るまで
自由に嬉々として
めい〳〵もち場所に一人々々ちらばり
原の隅から一人が打ち上る球を走つて行つてうまく受取る。
十五人餘りのそれ等の職工は
一人々々に美くしい特色がある
脂色に染つたヅックのズボンに青いジャケツの蜻蛉のやう
なのもあれば
鉛色の職工服そのまゝのもある。

彼等の衣服は汚れて居るが、變に美くしい
泥がついても美くしさを失はない動物のやうに
左ぎつちよの少年は青白い病身さうな痩せた弱々しい顔だ
が、
一番球をうけ取る事も投げる事も上手で敏捷だ。その上一
番快活だ。
病氣に氣がついてゐるのかゐないのか
自覺した上でそれを忘れて餘生を樂しんでゐるのか
若白髪の青年はその顔を見ると、

何故かその人の父を思ひ出す
親父譲りの肩が頑丈すぎてほふり方が拙い。
教へられてもうまくやれない
受取る事は上手だ。
皆んな上手だどこで習つたのかうまい、
一人々々に病的な美くしいなつこ相な特色をもつて居る。
病氣上りのやうに美くしいこれ等の少年や青年は
息づまる工場から出て來て
青空の輝く下にちらばり

心から譜め合つたりうまく冷やかしたり、
一つの球で遊んでゐる。
雜り氣の無い快活なわざとらしくなく飛び出し出た聲は
清い空氣の中にそのまゝ無難に消えて行き
その姿はまるで星のやうに美くしい
星も側へ行つて見たら
あんなに青白く、汚ないにちがひない
一人々々の汚ない服や病的の體のかげから
快活な愛が花やいでうつかり現はれる美くしさ、なつこさ、

鐘が鳴ると彼等は急に緊張して
美くしい笑ひや喜びや好奇心に滿ちた快活さを一人々々
疊んでどこかへ隱したやうに
一齊に默つて歸つて行く。

幸福

幸福は
鳥のやうに飛ぶ。

自分の内から羽を生やして飛んで居る。
それをとらへよ。
空中にそれをとらへよ。
暖にそれをとらへよ。
手の内でも啼くやうに。
幸福はとらへるのが難しい
とらへても手の中で暖みを失ひ
だんだん啼かなくなつて死んでしまふ。

幸福は追ふな、とらへやうとするな
そのまゝにしておけ。
人間の冷たい手をそれに觸れるな。
人間の息をそれに當てるな、
清淨な空氣にそれを離してやれ、
それを追ふな。
遠く消えて行つても心配するな、
幸福のみは

神の手にあれ
生き暖き神の手にあれ
よみがへし給ふは神の息のみ
清淨な風と火の業にあれ。

創作家の喜び

見えて來る時の喜び、
それを知ら無い奴は創作家では無い

平常は生きてゐても、本當ではない
自分の内のものが生きる喜びだ。
自分の内の自然、或は人類が生きる喜びだ。
創作家は、その喜びの使ひだ。

初めて子供を

初めて子供を
草原で地の上に下ろして立たした時

子供は下許り向いて、
立つたり、しやがんたりして
一歩も動かず
笑つて笑つて笑ひぬいた、
恐さうに立つては嬉しくなり、そうつとしやがんで笑ひ
その可笑しかつた事
自分と子供は顔を見合はしては笑つた。
可笑しな奴と自分はあたりを見廻して笑ふと
子供はそつとしやがんで笑ひ

いつまでもいつまでも一つ所で
悠々と立つたりしやがんだり
小さな身をふるはして
喜んで居た。

自分は見た

自分は見た。
朝の美くしい巣鴨通りの雑沓の中で

都會から田舍へ歸る肥車が
三四臺續いて靜かに音も無く列り過ぎるのを
同じ姿勢、同じ歩調、同じ間隔をもつて
同じ方向に同じ目的に急ぐのを
自分がぴつたり立止つてその過ぎ行くのを見た時
同じ姿勢で、ぴつたりとまつたやうに見えた。
小さく小さく、町の隅此世の隅に形づけられて。
自分はそれから眼を離した時、
自分の側を過ぎ行く人、

左へ右へ急ぐ人が皆んな
同じ方則は支配されて居るのを感じた。
彼等は美くしく整然と一糸亂れ無い他界の者のやうに見え
た。
人形のやうに見えた。

自分は見た
夜の更けた電車の中に
偶然乘り合はした人々が

おとなしく整然と相向つて並んで居た。
窓の外は眞暗で
電車の中は火の燃えるかと思ふ迄明るかつた。
自分は一つの目的一つの正しい法則が
此世を支配して居るやうに思ふ
人は皆んな美くしく人形のやうに
他界の力で支配されて居るのだ。
狂ひは無いのだ。つくられたまゝの氣がする。
一つの目的一つの正しい法則があるのだと思ふ。

自分はその力で働くのだ。

今宵吾が家の

おう今宵吾が家の内の明るさよ
三つきり無い室は皆宮殿の如く擴がつていづくの室も、
輝きに滿ち渡れり
妻子は臺所に、吾は書齋にありて
このすばらしい明りの中に電光の如く心をとり替したり、

おう今宵吾が家の内の明るさよ
久し振りにて僅の賃錢を得たる貧しき家の如く
すばらしい光はいづこにも輝き渡れり
くすみたる壁、破れたる障子のかげより
隱れたる光の主は現はれ給へり

おう今宵わが家の内の明るさよ
吾この喜びを妻子に分たんと欲す

心苦るめる妻よ、月末の拂ひを案ずる勿れ
妻よ、汝の病ひは癒やさる可し
妻よ、子の未來を煩ふ勿れ

おう今宵吾が家の内の明るさよ
隱れたる光りの主は吾が家のほとりを通過し給ひ
吾等が日常の悲しみをその光れる劒にて拂ひ給へり
貧しき吾等が妻子よ、案ずる勿れ
吾等が未來は日くらむ計りの輝きに滿てり

おう今宵吾が家の内の明るさよ
吾等は輝ける白刃をもちたる天使の内に圍まれたり
さながら太陽は壁一重のところにあるが如し
おう今宵吾が詩は夥しく成れり
吾この喜びを人々に與へんと欲す

雨の前

自分は田の畔を歩いて居る

空にはどこかで降つた名殘の雲が續々と流れ來り
その方向の切れ間から靜かに白光の鏡が照つてゐる
そこから涼しい風が吹いて來る。
自分の行く道のほとりには星の冠を戴いた髭のある葱や
梳き流した髮の上に簪をさした穗の出揃つた麥や
名も知ら無い莖の太い莓のやうな黃ろい花をつけて
皆んな勢揃をして涼しい風に吹かれてゐる
雨の來るを持つて居る。

ひろい田の中の道は人が彼處此處にいそいでゐる
大工がある、畫家がある、學生が行く
行列してゐる一家族もある。夫も妻も子供を一人づゝ抱い
て居る
彼等は今にも降つて來相な空の下をいそいでゆく
その中に大きな體の百姓がいろ〳〵の形をして土に親しん
で居る。
雨の降つて來る間際まで仕事を止めずに落着いてゐる
大きな尻を空へ向けて曲んで畠の草をむしつて居る女や

自分の畠を見廻つてゐる脊の短い百姓の笑みを含んだ日に
焼けた黒い頭はまるで植物のやうだ。熟した蔔萄のやう
だ
それ等の人々は皆んな植物の中から現はれた神の顔のやう
だ。
麥は彼等の衣で葱の玉は彼等の冠だ
かゝる神々はあちこちに働いてゐる。
田の畔で一人で草を刈つてゐる百姓も笑つてゐる様だ
遠くつて顔は見えないが心があり〳〵見える。

彼等は恐悦してゐる神だ。
皆んな他の村から流れて來る雲を喜び、亢奮して眺めてゐる。
畠の中の小さい水溜めのほとりには
鼻垂しの子供が集つて木綿糸で釣をして居る
赤ん坊を脊負つて土の上にぢかに腰をかけて居る
赤ん坊のニョッキと出た足は地面につかへてゐる
その十二三の男の子は脊負つた子供ととけ合つて
一團となつて、その二人を生んだ母のやうだ
初め見た時は女かと思つた、二人分一つに見たのだ

その側にちやんと母がくつついて見守つてゐる樣だ

濁つた水の中では人が居るのも平氣なもので
無數の御玉杓子が大きな頭を動かして浮き上り水面に屆く
と
今度はまつ逆樣になつて尻ぽを振つて沈んんでゆく
雨の降る前兆と蛙になり變る運動をくりかへしてゐる
見てゐると可笑しくて御玉ぢやくしも笑つてるやうだ
子供は鮒のかはりに菜屑を釣つて喜んで居る

雲はどん〳〵流れて來るが白い鏡はます〳〵光つてゐる
水の面も妙に明るくなる
どうやら雲は過ぎて行き相だ。

春

わが側に妻と兒は健やかにあり
戸外には美くしい春が來た。
自分達の心を惹き立てるのに

からも凡てのものが揃つて居るのだ。
春は地上を大洋の様に沸き立たす
青空の膨れた暖い波は静かに天地を洗つて居る
春は天地の墻壁を打ち破つた
滞りなく通路が出來、封鎖された氷の港は開かれた。
とう〳〵戸外で一日過せる時が來た。
自分達をあれだけ困らした冬の泥土は不思議の様にあとか
たもなく去り
日光を沿びた大地からはもう乾いた埃が立つてどこの道に

も人が闊がしく歩いてゐる。
皆んなどこか晴々してゐる。
日光の静かさを見ただけでつまら無い事は消してしまふ
それだけ人は敬虔になる
遠い町を通る車の音が鳥が群れて啼き渡る様に聞える。そ
れを聞くと自ら心が賑つて來る
おゝ春、春は希望の色だ。
人間にも草木にも希望が見える
人間も草木も眩しくなる

戸外で一日過せば健康も希望もとりかへす
自分達は遊び暮らした一日を晦まない
眠る時には明日の天氣が氣になる許りだ。
戸を開けば模糊たる空に、あゝ遠い所に
騒がしい小さな星がかたまつて出てゐる
明日の天氣も大丈夫だ
急いで戸を締めて元氣よく寢床へ着くと
あゝ安らかに眠れる春よ
胸に希望を抱いて眠りに着くのは喜びだ。

嵐

彼女は一人の子供を脊に負ひ
二人の子供を兩の小脇に抱へて家を飛び出した。
嵐は彼女は家の屋根を剝ぎ取り壁を崩した。
彼女は家が微塵に碎けて飛ぶ魔の翅の様な凄い音を空中に
聞いた。
彼女は闇に圍れ、雨にぐしよ濡れてその着物は身體にへばり

着き彼女の髪は亂れた
天地は崩るゝ許り大音響に滿ち
天地は共に動いて居た。
天は嵐と雲と飛び、地は川が汎濫して流れは早く彼女の膝を
隱した。
三人の子供はおびえて聲も立てなかつた。氣を失つてしま
つた。
母は流れ來る家の破片や材木や樹木に傷つけられて闇の中
で進路を塞がれた。

彼女は一人の女の子の髪を口に食はへ
自由になつた片手で寄せて來る障害物を掻き分けて進んだ。
されど人力限りあり
彼女は力盡きて小脇にかゝへた子供を水にとられた。
狂氣の如うになつた母は尙も二人の子供を脊負つて嵐の吠
へ狂ふ中を突き進んだ
夜が明け離れ村人は淺瀨の上に正體も無く倒れてゐる彼女
と子供を見出した。
脊の子供も髪でくはへて來た女の子も無事であつた

けれども母は全身に傷だらけとなり
子供の髪をくはへて引張つて來た口は
兩側の歯の根がゆるんで皆んなぐら〳〵になつた
嵐は樹の根をゆるめる樣に彼女の歯までゆるました。

曙

朝町の兩側の家々は未だ戸を閉ざして居る
往來は波打際の樣に幅廣く黑々と濡れて居る

人氣無い寂しさと靜かさが溢れて居る
早起きした人が都會の方へ、又都會の方から通る
皆んな默つて口をつぐんで一人づゝ通る
天地にはまるでもの音が無い
人の心には何か活きてゐる。深い決意がある
日はほの暗い遠い波濤を見渡す樣な
暗い無限の奥から
幽かに現はれて來る。
その光りの寂しさ

日の方へ向つて行く女がある
彼女は色の褪めた袴をはいて、包みを胸にかゝへてゐる
どこかの事務員か何かだらう
こんなに早起きして
子供や年寄りの食べるものをつくつて置いてから
急いで出て來たのだらう
彼女は未だ時間もあるので餘り急が無い
遙かに暗い奥から一線の日光が
黑々とした町の中央へ洩れて來てゐる

その薄い弱々しい光りの中へ彼女は半身を現はして歩いて
ゆく
その寂しい光りに靜かな憂愁のある顏をぬくめつゝ
寒い寒い朝明けを都會の方へ歩いて行く
彼女はだん〳〵急いで行く
日の光りもだん〳〵急いで登つて來る
彼女が都會へ入つた頃
太陽は町々を輝やかすのだ

象

動物園で象の吼えるのを聞いた

象は鼻を牙に卷きつけて巨きな頭をのし上げて

薄赤いゴムで造つた様な口を開いて長く吼えた。

全身の力が高く擡げた頭に許り集つて仕舞つた様に

異様な巨きな頭が眞黑になり隱れて居た口が赤い焰を吐いた。

その聲は深く、寂しく、恐ろしかつた。

象は一息吼え終ると鼻を垂れてもとの姿勢に戻りぢつとして居た。

實に凝つとして居た。二本の巨きな前足が直立して動かなかつた。

細い眼を眞正面に据ゑて動かなかつた。

その眼の靜かさは人を慄へ上らせた。

二分三分、四分位經つと再び象は鼻を口の中へ卷き込んで食はへた。

然うして異常な丈となり、不思議な痛ましい曲譜を吹き鳴らした。

ブル〳〵と震へて何處までも登つてゆく樣なリズムがあつた。

荒々しい、然し無限な悲哀を含んだ此世の聲とは思へなかつた。

遠い原野をさまよふものゝ聲であつた。

爭ふ樣な祈る樣な、何者か慕ふ樣な幼ない聲であつた。

象は長く吼えて力が盡きると又もとの姿勢にかへつて凝つ

と靜まり返へつて前を見詰めて居た。

その古びた灰色の脊骨の露はれた姿は靜かさに滿ちて居た。

限り無く寂しいものに見えた。

自分は默つて彼の姿を見て居た。自分の眼には涙が浮んだ。

彼は何か待ちのぞんでゐるやうであつた。

此世の寂寞に耳を澄ましてゐるやうであつた。

何か催すのを待つてゐるやうであつた

聽て彼は又何ものにか促されて凄じい姿となり、巨頭を天の

一方に捧げて三ヘン目を吼えた。

四ヘン目を吼え終つた時、彼はその鼻で巨きな禿げた頭の頂きをピシャリと音の發する程嬉し相に叩いた。

何か吉兆に觸れた樣に。

五ヘン目に彼は又空に向つて何ものか吸ひ上げる樣に吼えた。

轟く雷か波の樣に音は捲きかへして消え去つた。

それからもとの姿勢に戻つて習慣的に體を前後にゆさぶり初めた。

足も鼻も尻尾も動き出した。

彼はもう吼えなかつた。

天啓

自分には時として狂風が起る

景色の中を歩いてゐる時等殊に起る

子供は家の中でも毎日起してゐる

木の葉の樣に吹き捲られてゐる。

あれは靈感だ。颯爽として起る

天から降つたのか、地から湧いたのか
突然に湧き起るインスピレーションである。
畫家はこの時目に見てものを發見し
詩人はこの時心から歌ふ
かゝる靈感なくして自分は一筆も書けない
かゝる瞬間本當に自分は生きてゐる
人は太陽を眺める、星を見る。大陸を見る。
他人を見、女を眺める。
然し眞にそれを見る時はすく無い。

突如として人はそれを見る
人は吹き飛ばされる。
宛ら自分の位置を轉換された樣に
颯爽として彼、我の存在を感知する。
かゝる瞬間の喜びよ、法悅よ？
日常生活の蔽ひは碎け、人は神の中に攝取される。

村の郵便配達

村の郵便配達は深夜の雨の中を進つて來る。
角燈を片手にさげて
全身鱗のやうに雨と光りにたら〳〵濡れて
鎧を着て進つて來る。
うしろには銀の征矢を一杯脊負つてゐる様に
篠突く雨が入り亂れ
寢鎭つた家の前に息をはずませて立止る。
眠つたところを起されて、恐々戸を明けた人は
闇の中に飛沫に打たれて明るく立つて居る彼を見る。

人氣無い山道や森や畠の中を暗い雨夜にたゞ一人
永い間默つていそいで來た彼は
淋しさや恐ろしさや村に辿り着いた嬉しさに
心氣亢進して輝くやうだ。
黒い頭巾の蔭のその顏は燃え上つて透き通つた瑪瑙(めなう)の様に
赤るみ
異様な大きな溫しい眼を光らして
鱗の様に光りの流れるカッパの蔭から貴さうに手紙や葉書
をとり出す。

雨はざん〳〵降りしきり
郵便配達は熱い息をはずませ、受取る人も沈默し
闇と光りの中で眼を集めて選り分ける濡れない葉書や手紙
の美しさ
光りの中に浮んで闇に消え入る人の宛名の美くしさ
人はその中から自分に宛てられた手紙を受取つて感謝する。

村の郵便配達は暗い雨夜を只一人
カッパの蔭に角燈をひそませて

寂鎭つた村を一人で輝き横切つて行く

雷雨の停車場

雨が降る
雷が鳴る
稻妻が光る
神が高い天上から闇の底の都會を照らして眺めて居るやう
だ。

停車場を目がけて自働車が雨を冒して辷つて來る
光りが雨を貫け無いで吹きつけられて粉を吹いてゐる
とまると中からおびえた女が飛び出してすた〳〵奥へ行つ
てしまふ
自働車はとまつても息をはずましてゐる
汗をだら〳〵垂して居る
どこかに雷が落ちたらしい
濡れた人が頭をちゞめて建築物の下に馳け込んで來る
停車場の中は人氣がない

窓子窓から覗くと構内は暗と光りに輝いて居る
火事のあとのやうだ。蒸氣の湯氣と煙が風に朦々とさらは
れてゐる
無數のレールが濡れて火のやうに光つて居る
彼處此處に機關車が鱗の怪物のやうに横つて居る
赤い角燈をさげて潜水夫のやうな黒いカッパの頭巾を冠つ
た驛夫が
煙と光りと闇の中に現はれては天上へ消える
アーク燈に風が入つて消え相にハタ〳〵してはすぐ暗くな

る

その度びに構内は一時に闇黑となる
建物の中はシーンとして
人氣なく秋の夜の沈默に沈むでゐる。

（一九一八、七月）

輝やかしい夜

自分の留守に誰か來てゐる

机に向つて何かしてゐる。
それは母であつた
二月以上會はなかつた母であつた。
多くの弟妹を田舍へ送つた日から會はなかつつた母である。
「いつ來たの」
「もう少しで歸るところでした。あなたが御出掛けになると
すぐ來たの、御隣りの方に御深切になりました、御茶をいれ
てもつて來て下さつたり、」
二人は興奮した。氣が狂つた樣に

母も自分も顔を見合はすのが恐かつた
室の中を歩いて立つたまゝ大きな聲で話した
別して母の聲は大きかつた。
自分が茶を汲みに立てば母はすぐ立つてうしろへついて來た
さうして母は饒舌つた
自分は苦るしくて默つて許り居た。
云ひ度い事は云へずに餘計な事許り云つた。
二人とも涙ぐんでゐた。

二人とも變になつて居た。
父が亡くなつてから後のさま〳〵の變遷を二人は話した。
田舍へ行つた澤山の弟や妹の事を話した
二人は默つた。御互の思ひは分つてゐる
父が生きてゐたら如何んなにいいだらう
母は話の途中でしげ〳〵自分の顔を見た。
自分は眼を反らさうとしたが。默つて顔を見たるまゝにまかせた。
母は涙ぐんで變な聲を出した。

此頃は自分も自分が信じられなかつた。
だが自分は心配するなと思つた。
今この會つて居る喜びで澤山だ。
何と云ふ輝やかしい面會だ。恐ろしい對面だ。
妻子が留守で俺が夕飯をあつらへて來た。
母があつらへに行かうと云つたのを止めた。
あつらへに行つても氣が氣でなかつた。
とんで歸ると母は坐つてゐられないで立上つて玄關に待つて居た。

久しぶりで二人は向ひ會つて食べた。
喉にはとても通ら無い、少し食つては止める
涙に霞んで茶碗が見えなくなる。
母の話を聞けば一々涙ぐむ。
人知れぬ苦勞の話を自分は只口も利けないほど亢奮して聞いた。
口よりも涙が先きになつた。
何でもはい〳〵察して聞いた。
察するに餘る苦勞の數々を

然うして又助け手の無い中で多くの他人が母に對していか
に
深切を盡してくれたかを。
どこへ行つても母は助けられた。
飛んで行つてゞも御慰めしたいと云ふ人や
默つて多くの金を貸してくれた人や
あらゆる深切の申し出をしてくれた人の多いのに
母は感謝した。自分も感謝した。
母は云ひたい事を殘らず話した。

さうして子供に會へなかつたのを殘念がり
雨降りの中を妹の家へ歸つた。
停車場で二人は口に出さないが
別れるのが辛かつた。苦しかつた。
一緒にその儘抱き合つて死に度い位
一人で家へ歸つて來れば
もう自分には用がなくなつて仕舞つた樣だ。
妻子は田舍へ行つて留守だ。
見廻せば室の中はどこからどこまで形附けられてゐる

戸棚の中も綺麗になつてゐる。
母が自分の歸りを待つて居る間にすつかり掃除をしてくれたのだ。
母の置手紙を讀めば又も母に會ひたくなる
心臟がドキ〳〵躍り、不安でたまら無い。
若しも會へずに歸つたらどんなに二人はつまらなかつたら
う
母の置手紙は何から何まで云はうとして矢張り會つて行きたいので、手紙を長びかしてゐる。

となりの時計が七時を打ちました、等とかいてある。
幾度も歸らうと決心してぐづ〳〵してゐたらしい。
あゝ會へたのは感謝である。
父の家のほとりを通つて
小學校の庭で遊んでゐる子供を見て
電車の中で泣き出して困つたともかいてある
自分は頭がはち切れるほど泣いた。
もう一度母に會ひたい
母と一緒にいつまでも默つてゐたい。

机の上には小さな金包みがおいてある
母の名前と金參圓とかいてある
それを見れば又涙が湧いて來る
恐ろしい一夜だ。氣が狂ひ相だ
心氣亢奮して云ふに云はれない若るしさ
外ではのろ臭い雨が降つてゐる。
もう一度母に會ひたい、もう一度母が見たい
妻子よ明日は是非歸つてくれ
僕は一人でゐる夜が恐ろしい

この輝やかしい夜が恐ろしい
幾度も床へ入つては飛び起きた。
考へ出すとすぐ苦るしくなる
臺所から金盥を持つて來て
頭と云はず胸と云はず水をかけて冷やした
體は亢奮し切つてブル〳〵ふるへてゐた。
母の置手紙と、金包みと、子供のごむまりとを枕頭に置いて
それをぢつと見乍ら心を安めようとした。
幾度も醫者へかけつけようかと思つた

隣りの人を起さうかも思つた
妻子にも遺言を書かうかと思つた。
室に眠れないで玄關へ寢た。
インキをとりに室へ行くのが恐かつた。
手足がひきつつた。
自分は滅茶々々に思ひ亂れて眠りに陷ち入つた
十三時間一氣に眠つた。
何も思ひ出さない眠りを貪つた。
翌晩は又淋しくなつた。

妻子は歸つて來ない。
氣が狂はしいほど塞るので外へ出かけやうと仕度してゐる
と
妻の父が山の仕事場から遺つて來た。
子供に菓子、俺に刻み煙草と、魚を買つて
氣持が塞いでたまら無いので急に思ひ起つて來たと云ふ。
自分は助かつた。
父の好物の酒をあつらへて二人で靜かに話す內
自分も妻の父も氣分がすつかりよくなつた。

七十になる父は一合の酒にいゝ氣持になつて床へ入るとすぐ眠つた。

自分は妻へ電報を打つて來た。

明日は歸つて來るだらう。

自分は落着いて母へ禮手紙をかいた。

すつかりあの晩の事を白狀してやつた。

あれから涼しいいゝ日がつゞく

思ひ出すと涙ぐむ。

裸の女

泣いてゐる、泣いてゐる

眞裸の女が泣いてゐる

恥ぢと恐れに包まれて

裏切られた女が一人

永遠の中に突き遣られ

蹴落された女がひとり
父も無く、母も無く、兒も無く
オヽ救ひ手も、希望も無く
蔽ふところも、蔽ふ衣もなく

恥も身も忘れて、夜の闇の底に
誰も顧みては呉れ無い眞心の涙が
淋しい闇へ落ちてゆく
絶えず涙は滴り落ちる、夜の闇の底へ

夜の町にて

夜になると
呉服屋の店先に
女が澤山集つて來る。
燈火に集る魚の樣に
ぶら下つたメリンス布に
ちよい〳〵と手を觸れて

食ひちぎる様に引張つて見て居る。
彼方でも此方でもやつて居る。
こけらのとれた様な汚ないなりをした
いろ〳〵の哀れな女が
子供に買つて遣りたいのか
もの欲し相に
電燈の一杯ついた明るい店先で
綺麗な色の布と布の間を
恥も見栄も無くうろついて

ぶら下つた布を引張つてゐる。

夜の人々

夜の電車は走る。
茫々たる暗夜の中を
そのきしり、轟き
響きかへる夢、
こゝにばかり世界中の光りを集めたやうな

室内の破裂し相な輝き
その中に居並ぶ人々の霊妙な姿
あつち、こつちに光る眼
海底の洞窟の間から輝くやうな默つた人間の軀からたゞ二
つあつち、こつちに光る眼。
眠らない大きな正直相な眼の輝き、
疲れた頭から輝く恐ろしい眼、
氣味惡いまで透き通つた皮膚の青白さ
自分の下りる處を通り越すのを恐れる如く

幾度も硝子窓から外を覗いて見る女のおびえた瞳
あゝ夜の世界の一端に集つた人々の氣味惡い慕しさ
大なる家族を暗示するこれら一團の夜の人々の恐ろしい輝
き
粗惡と醜い肉體のどこからか
贅澤な靈妙な光りが射して
ずた〳〵に人間の要素を放射してゐる悲慘
極端に醜いものと極端に美くしいものゝ一團。
その頭の上で遙かに高く更けて行く空の感じ

茫々たる夢。とりかへしのつかない悲嘆！
その健康と疲勞、眠りたる者、眠らざる者、
滿足なものと心配な顏々。
あゝ夜の電車の中に休息する人々の怪しい夢
太陽の光りを盜んで走るこれ等一團の山賊のやうな恐ろし
い人々の悔いたる眼！
その肉體から唸り出す
いびきと吐息、くり言、懺悔、
それ等のものを掻き消して轟々と電車は走る。

滅茶々々に空の下を走る。
急に心細くなつたやうに走る。
その響きのまきかへす果ての空の淋しさ。

散　歩

天から降るすばらしい夜氣の
靜かさと涼しき輝きの中に
家を忘れて眠らないで歩く都會の人々。

その呼吸する顔々に現はれた安らかな平和
放縱な思ひ切つて安泰な姿

平和よ

平和よ、平和よ、來れ、それは自然だ。こだはつてこだはつた俺の心よ、休まれ、今日こそは休まれ、かの敵は自分の所へ來た。和解何と云ふ喜びだ、むしろ俺が恥づかしい思をした、俺は祈る。どうか彼の上に幸福あれ、本當に御互に淋しいのだ。

この上疑つたら俺の恥だ。俺よりも年とれる彼よ、休まれ。安らかなれ、自分の疑ひを許してくれ。凡ての恐怖。不安、疑惧の去つた時、人は泣かずにはゐられ無い。汝に惡意の無い事を知つた自分はどれ程後悔していゝのだらう。疑ひよ、汝位いま〳〵しいものは無い。だが今日は嬉しい、喜びよ、喜びよ、かたくないわが心を笑へ。

それにしても戰爭は早く終へよ。平和のしるしが見える時は喜びだ。

平和、平和、家庭においても、社會に於いても、國家と國家の間に

於いても平和であれ。
永くつゞく平和よ來れ。飽きる程長い平和よ來れ、平和のみ自然だ。平和の喜びを少しでも知つた自分は凡ての平和を願はずにはゐられ無い。永い間の雨降りが止んで雲の切れ目が見えてそこから青空が見えるのは嬉しい。その喜びは誰でも知つてゐる。平和を愛さない人間は無い、平和を知らない人間も無い自分も實に小さい平和の喜びを知る。壓抑されて居た心が喜び勇むのを知る。どうか再び自分の心に嵐の雲の蟠ら無いやうに。然うして大きな平和を知り感じ

喜べるやうに。

或る日

降つた、降つた
昨夜は夜通し騒がしく
幾度目を覺ましても止むどころでなく
これでは明日の日曜は駄目になるだらうと
寢飽きる程寢て起きて見ると

嬉しや、急に日が照り出して
出る。出る、家に殘つて居る人があるのかと思ふ程
どこの往來も人で押し合ひだ。
昨夜の雨で押し流されて來たやうに
櫻の花の斑らに散つた汚い地面にはねでゐる。
空も斑らだ。あつち、こちに雲の塊りが出來て居る
日に照らされて約束が違ふぞと不平顏だ。
だがそんな事に頓着なく地面はどん〳〵乾いてゆく
皆んな吸ひ上げてしまふ

その中で急ごしらへの生れたての蝶々が
未だ出來上らないのだとうしろから
捕へられる怒恐がるやうに
大急ぎで恐いやら嬉しいやらで水蒸氣に
足をとられ乍ら先へ先へととんで行く
生れた許りの喜びに興奮し切つて

光り

どこからか優しい光りが來る。
どこからそれは來るのか知ら無い
月のある高い高いあの空からか
どこからか人の心にさして來る光り
あゝそれは此世のどこかにすばらしい大きな寶が埋めてあつて、それが人に見出され無い爲めに光つてゐる、その光りでは無からうか。
だん〳〵にその光りは強くなる。
だん〳〵にその光りは冴えて來る。

あゝ其の光りは人の眼に涙を浮せて來る。
誰かその寶物の埋められた在家を探し出すのも遠い事では無い氣がする。

月夜

騷がしい不安な風の空に
月がのぼつて居る。
葉の茂つた細かい木が風に吹かれて

籠のやうにくつきり空に戰いてゐる
月は道の眞正面の空にある
月の下は海原のやうに明るんで居る
飄々と細い雲がのぼる
月の方へ明るみの方へ
人が歩いてゆく
子守兒が多い
一杯全身に光りを浴びて居るのも知らないで
呑氣相に二三人で話し乍らのろ〳〵歩いてゐる。

眩し相にうつむいた人妻が一人いそいで通つた。
うつむいた陰の顏は少し笑つてゐた
月を脊にして行く人は
時々ふりかへて月を見る
月のさゝない暗い横丁へ曲つた時、うしろで
リン、リン、リンと鈴を鳴らして
乘合馬車が通る賑かな音が聞えた。

眼

春の夕の巷の上に
光り輝く燈よ
おう汝の光りを見てゐる
もう一つ大きな目が輝いて居る
きつぱりと流れて行く眼があるる
それには誰も氣がつかない。

或る夜の氣紛れ

いゝ晩だ
私は久しぶりに幸福で樂しさを感じた
一人でこんな夜を過すのは惜しい氣がした
私は田舍にゐる妻子を思つた
急に逢ひ度く成つた
私はこんな晩靜かな山の麓の家で

ランプの燈影にゐる妻や子や妻の母を思つた
私はこんな晩、星影を見乍ら
村々の燈りを見乍ら
二三時間の旅行をするのも愉快だと思つた
私は急に、いそいで仕度して
停車場へかけつけた
が殘念に汽車はもう明日で成ければ出なかつた
私は淋しい木造の小さい停車場のがらんとした人氣ない待
合室を出た

私は小さいふろしきをもつて
ゆくあてもなく
且て妻や子供とよく散歩した
靜かな畠や林の方へ歩いて行つた
ほの暗い、涼しいいゝ晩で
茂りの多いこの邊りの家からは
靜かな燈光が參爲として
木に映つて居たり道に洩れて居た
私はあり餘る幸福の思ひを抱いて歩いた

これを誰かに分ちたいと思つた
私は茂みの敝ふ星明りの道を歩き乍ら
且て妻とこゝで接吻した事や
子供達と花を折りとつた事等を思ひ出し乍ら
黒く輝く地面をたまらない懐しさを抱き乍ら歩いた
そうして私は行かれなかつた田舎の村はづれの
靜かな家の幸福を滿天の星輝く室に向つて祈つた。

凉夜

今夜は空は高くて暗いけれど
凉しい晩だ。
風が靜かに木立に寄せては
撫でゝ居る音が吹いては消える。
時々露が落ちる大きな音がする。
町の方では自働車の笛が水の中で鳴る樣にポンポンとする

空氣が深いのだ。
室の中には電氣が明るくともつてゐる
室の中を立つて歩いても
空の高いことが意識されて居る。
星の一杯澄んで居る高い空の下で
かうして動いて居ると云ふ感じが
自分の心を靜かに抑へて居る。
涼しさに堪へないやうに
近所の牛屋の牛が高く啼いて

木の方を永く引張つて弱らしてゆく。
靜かだが妙に騷しい晩だ。
暗に紛れてガ、ガと鳥が低く飛んでゆく
すてきに小さく聞えるのは
高いところを飛んでゐる奴だ。
暗けれど妙に明るい晩だ。
風は絶え間なく木立に寄せては撫でゝ居る。
てんな晩に火に觸れた樣に焦げた青葉が澤山地に落ちる。

いなの兒

淋しくなると川のほとりへ行つた
夕潮が滿ちて來ると
未だ食べる事も知ら無い生れたてのいなの兒が
岸に群れて來て
蛇の巢をひつかへした樣に
銀色にもつれ、溢れて

勢よく走り廻つた。
大騒ぎをやつた。
空には一寸と出てすぐ隱れる
二日餘りの月が出て居た。

淸らかな景色の中で

河原の中の淸い小川の流れの前の
小草が綠に生えたところに

白くは見えるが汚れたシャツを着た老人が坐つて
大きな椀で晝の辨當をつかつてゐる。
老人のうしろは廣い河原で
そこでは仲間が砂利を掘つて運んでである。
荷馬車が遠くに置いてある。
自分は堤の上に轉つて遠く、から見てゐて感動した。
清い流れを前にして草生の中で
辨當を使つてゐる老人の姿は
まるで子供の樣に美くしく見えた。

老人は食べてしまふと椀を流れでゆすいで居た。
叮嚀に靜かに何べんも何べんもゆすいで居た
自分は美くしいと思つて涙ぐんだ。
こんな幸福な生活がどこにあらう
が自分達はこんな生々した、美くしい生活からはどんなに遠
ざかつてゐるだらう
こんな美を味ふ事が出來なくなつてゐるのではないか
老人が食べるを止めた時分
又一人の若い勞働者が老人から二間許り離れた上に坐つて

同じ様に清い流れを前にして辨當を使ひ出した。
胡坐をかいて、片手に辨當箱をのせて膝の上に休め乍ら四邊
の景色を見てゐる。
食べる事も忘れた様に、
感謝を捧げてゐる様に。
いゝ天氣で遠い山々や河原や麥畠は透きとほる様な景色で
ある
こんな清らかな景色に包まれて
その中で働いたり食べたりするのは何と云ふ應はしい事だ

らう
自分はこの自然に何と云ふ應はしい多くの事をしたり、考へ
せりして暮らしてゐるのだらう
自分はまるでシャバンヌの繪にあり相だと思つた。
まつたくその儘立派な壁畫だ
自然の風景も勞働者も共にとけ合つてゐる
どこにも無理が、なくそのまゝだ。
自分は涙ぐんで堤の上を歩いた。
あゝそれに比べて自分の生活を思ふと

何と云ふ恥づかしさだ。
この透きとほる様な景色の中で
堤の上に寝ころんで、煙草をふかして
何を俺の頭は考へてゐる
恥づ可き、卑しい事を空想してゐる
オヽ、恥ぢよ、恥ぢよ。

田舍にて

一日一日と夏が深くなる
一日一日と空が高くなる
地上に近く下りて來て
春から一生懸命働いた空は
先づ爲す可き事をし終つて
ぐんと高くなる。
地上ではすばらしい天氣が續いて麥刈が初つた。
雲雀は巣を失つても
雛は空に舞ひ上れる程元氣に揃つて羽が生えた。

親子揃つて朝から晩まで畠の上で
四邊構はず陽氣に啼いて居る。

思ひ切り高くなつた涼しい空へ
息もつかずに一氣に、のぼる。

太陽は今日一日の旅を終つて
自分の歩いた道を顧み乍ら
靄に包まれて休んで居る。

もう力を出さ無いで靜かに落ちて行くのだ。
熟し切つて赤くなつて居る。
百姓は美味を含んだ空氣の中で
露の下り無い前に
いゝ天氣に伸び切つて、よく乾いた桑を切つて車に積んで運
んで居る。

太陽の耕し通つた道は
馴れるだけ深く清められ
桑切る人の心は躍り

車を曳く人の心も勇む。
空氣の中には目に見え無い深い彈力がある。
其處を通る人は自づと活氣づく
何かに觸れたやうに生々する。

夜は靜かに何事も無く暮れる
朝夕が全く靜かに來り迎へられる。
地上は暗くなつても空は明るく
何處の家でも昨日の夕方の樣に

澄んだ燈火がきつぱりとともり
驚く程大きな聲で人々は話し
子供も老人も皆んな外から歸つて
貴い客でも迎へた樣に
家の內までも甘い草木の匂ひがたゞよひ
畠ではもうとつくに雲雀は默つて
一匹も啼かぬ無い蛙は無いやうに
遠い田甫の蛙近い田甫の蛙も
何千何萬の蛙が賑かに昨夜と同じ歌を繰り返へし